

「私らは侮辱のなかに生きている」

2014. 12. 22 須田 稔

表題は、大江健三郎が二〇一二年七月一日、東京の代々木公園で行われた「さようなら原発10万人集会」で中野重治の言葉を引いて言った、と白井聡が『永続敗戦論』第一章第一節の標題に使っているものだ。

きょう2014年12月22日付『しんぶん赤旗』の1面は、「在日米軍関係経費 日本負担6739億億円 14年度 米兵・家族1人あたり1240万円」「日本国民には負担増」という見出しの大記事。

その中に、「映画「ザ・思いやり」制作中 来春完成予定 米国人リラン・バクレーさん(50)」の談話が掲載されていて、そこに「侮辱」という言葉があるのだ。長いが引用しよう。

「米軍が米兵を日本に赴任させるときは、疎の家族に納得してもらう必要があります。「米国にいるときより良い生活ができる」と。米軍はそのためのビデオを作っていました。ゆつたりとしたソファ、便利なキッチン。米兵の妻が喜ぶ様子を映し出しています。米兵のこの豪華マンションは日本の「思いやり予算」で造ったものです。

米軍のこのビデオを、東日本大震災の被災者、石巻市の仮設住宅で暮らす人びとに観てもらうと、ある人が言いました。「隣に住む人のくしゃみだって聞こえる所に私達は住んでいる。これは日本人を侮辱している話だ」と。・・・「思いやり予算」は軍事だけではなくて、経済そして倫理の問題も投げかけています。被災者が仮設住宅に住んでいるとき、消費税増税で日本国民が苦しんでいるとき、日本国民の税金で米軍のために住宅を建てて良いのでしょうか。これが正気な主権者の良識だ。

白井聡氏の言葉を引用する。「福島第一原発の事故以降引き続いて生じてきた事態、次々と明るみに出てきたさまざまな事柄が示して

いる全体は、この日本列島に住むほとんどの人びとに対する「侮辱」と呼ぶほかないものだ。あの事故をきっかけとして、日本という国の社会は、その「本当の」構造を露呈させたと言つてよい。明らかに変わったのは、その住民がどのような性質の権力によって統治され、生活しているのか、ということだ。そして、悲しいことに、その構造は、「侮辱」と呼ぶにふさわしいものなのである。

だからわれわれは憤つて良いし、憤つていいし、また憤るべきである」。(太字傍線は須田) 憤るべき状況の一つ、在日米軍関係の経費で日本人民が負担している二〇一四年度の経費6739億円は、外務省が赤嶺政賢衆院議提出した資料をもとに『赤旗』紙が計算したものであることは明確です」と述べたこと、これについて、沖縄国際大学の前学長・富川盛武氏は、「驚くことではない。基地はない方がよい。跡地利用した方が経済効果が高いという認識は前県政から共有されました」と語る。最新の県統計では、軍関係収入が約2000億円に対し、観光収入は約4500億円であり、富川氏は、「アジア地域に近い地政学的な優位性に加えて「沖縄固有の自然、伝統、文化というソフトパワー」の魅力を挙げ

る。この日の『毎日』は3面「クローズアップ」で「テロ拡散 遠い平和」「アフガン駐留米軍 月内撤収」「民族確執 内戦再発も」の見出しで米国の「不朽の自由作戦」の迷妄を記している。「テロとの戦争」は帝国主義的覇権主義の腐朽を物語るもので、報復の暴力を誘発する軍事的・経済的暴力行使という極悪の人民侮辱・戦争犯罪にほかならないのだ。